日本語日本文學第三十一輯
2004・3・26『輔仁大學第五屆中世紀學術研討會−歐日中世文學中的無常觀』での講演
頁１−20

《邯鄲の夢》
明雑劇「呂翁三化邯鄲店」と能の「邯鄲」

吉田とよ子

１　はじめに

「邯鄲の夢」——人生の無常を意味するこの言葉は、「黄粱一炊の夢」、「盧生の夢」という言葉とともに、日本人にも昔からよく知られてきた。その出典は唐の伝奇「枕中記」であるが、この物語が日本人に知られたのは中世（１１８６−１６０２年）で、室町時代（１３３６−１５７３年）には、それにもとづく能の「邯鄲」が書かれた。

日本の中世という時代は、源氏と平氏の合戦によって始まった戦乱連続の暗黒時代であった。人の命が軽視され、不安が社会のすみずみまではびこり、仏教の末法思想が流行するのとあいまって、人生無常の感が極度に強まった。中国の「枕中記」はまさにこうした時代の日本人の心に響くものであった。

「枕中記」は、中国でも影響力の強い作品であった。唐代にすでに広く流行し、李公佐（８１３年頃在世）の「南柯太守傳」、沈亜之（８２５年頃在世）の「秦夢記」などの伝奇小説もその影響下にあったと言われている[1]。詩も多く作られ、詩人は宋の王安石（１０２１−１０８６年）をはじめとして現代にいたるまで、あとを絶たない[2]。劇作においては、元代に雑劇「黄粱夢」が作られ、明代には雑劇「呂翁三化邯鄲店」（作者不明）が現われ、湯顕祖（１５５０−１６１７年）の明曲『邯鄲記』が書かれた。本論文は

---

[1] 「枕中記及其作者」((王夢鴎撰『唐人小説研究二集』・台北芸文印書館・１９７４年）４２頁

[2] 梁辰・張志東選注『黄粱夢詩詞精選』（北京中国文聯出版・１９９９年）１８３首撰収。

これら作品の中から、明雑劇「呂翁三化邯鄲店」をとりあげ、能の「邯鄲」と比較対照し、中国と日本における無常観の違いを考察しようとするものである。

１　唐伝奇「枕中記」

明雑劇「呂翁三化邯鄲店」と能「邯鄲」の原典である「枕中記」は、沈既済（７８０年頃在世）によって書かれた。沈既済は蘇州の呉人で、経学に精通し、吏部侍郎の楊炎（７２７－７８１年）に目をかけられていた。楊炎が執政の地位を得ると、彼の推薦で左拾遺の地位を拝受し、史館で歴史編集の任に当たった。しかし楊炎が失脚すると、連座して罪を得、處州の司戸参軍に貶められた。後に朝廷に帰るを得て、礼部員外郎として終わったという経歴の持ち主である。『建中実録』十巻を著わし、伝奇小説では「枕中記」のほかに「任氏傳」を書いている。「任氏傳」は美女に化けた白狐が命がけで男に尽くす物語で、異類恋愛譚の傑作とされているが、より有名なのは「枕中記」のほうである。「枕中記」のあらすじは以下の通りである。

唐の開元七年（７１９年）のこと。神仙術を心得た道士の呂翁が、旅の途上、昔の趙の都、邯鄲にやってきて宿屋に泊まった。そこへ粗末な上着を着て黒毛の馬に乗った盧生という男が、畑に行く途中で立ち寄った。二人はうちとけて話し始めたが、そのうち盧生が自分のみすぼらしい姿をかえりみて、大きなため息をついて言った。

「男としてこの世に生まれながら、思うにまかせず、こうまで困窮しています。」

呂翁は言った。

「きみのからだを見ると、どこにも苦しみや病気があるようには見えない。今も心楽しく話に興じていたのに、なぜ急に嘆いたりするのかね？」

「私はただいたずらに生きているだけです。心楽しいことなどありません。」

「これで心楽しいと言えないのなら、どうすれば心楽しくなるのかね？」

「男としてこの世に生まれたからには、功を建て、名を挙げ、武なら将軍、文なら宰相になって、盛大な宴席につらなり、選び抜かれた歌姫の美声を聞き、一族に栄華と富貴をもたらすことができるならば、それこそ心楽しいことでしょう。私は学問を積み、文芸にひいでています。高位高官を得ることなどたやすいことだと考えていました。しかしすでに壮年にまで達した今、相変わらず畑で汗水流しているのです。これが困窮でなくて何でしょうか。」

そう言って盧生は眠そうな顔をした。すると呂翁は袋から枕をとりだして彼に貸し与えた。それは青磁の枕で、両側に穴が開いている。盧生が頭をつけると、穴がどんどん大きくなり、彼はその中に入って行った。

穴の中には別世界があって、盧生はそこで裕福な崔氏の娘と結婚し、翌年進士の試験に及第し、どんどん出世して行った。北方の蛮族が謀反を起こしたときは将軍となって征伐におもむき、敵の首七千を斬りおとす手柄もたてた。これによって吏部侍郎となり、さらに戸部尚書兼御史大夫にまでなったが、時の宰相に忌み嫌われ、中傷されて端州の刺史に左遷された。

三年たつと召し返されて常侍となり、それからふたたびどんどん出世して宰相の地位にまで達した。その地位に居ること十五年、嫉む者の讒言にあい、辺境の将軍と結託して謀反をたくらんでいると疑われ、逮捕の役人が屋敷になだれこんできた。驚き恐れた盧生は妻に言った。

「わしはむかし山東に住んでいて、よい田地を三十町近く持っていて、餓えや寒さをしのぐには十分だった。どうして骨を折って官位官禄をほしがったのだろう。今になっては短い粗末な上着を着て黒毛の馬に乗り、邯鄲の道を行きたいと思ってもかなわなくなってしまった。」

そして自害しようとしたのだが、宦官にとめられて果たさなかっ

た。さいわい死罪を減じられて驩州に流された。そこに居ること五年、冤罪であったことが知れて召し返され、再び宰相となり、平穏無事に暮らした。五人の息子に恵まれ、みな出世して家はこの上なく栄えた。しかしついに老齢となり、死ぬときがきた。そして息を引き取ったと思ったときに、目が覚めたのであった。

見まわすと、自分は邯鄲の宿屋に寝そべっており、呂翁がそばにいて、宿屋の主人が炊いている黍の飯はまだ出来上がっていなかった。呂翁が言った。

「人生の楽しさというものは、このようなものだよ。」

盧生はしばらく放心状態であったが、やがて言った。

「名誉と恥辱、困窮と栄達、成功と失敗、死と生とはどのようなものなのか、すっかり分かりました。私の欲心を止めようとしてくださったのですね。教えをありがたく拝受いたします。」

そう言うと、二度ていねいに辞儀をして去って行った。

以上が盧生の物語であるが、この物語がそれほど流布したのはどうしてなのであろうか。実はこの物語は沈既済の独創ではなく、六朝時代の宋の劉義慶（４０３－４４４年）が編集した『幽明録』に出てくる説話にもとづいている。その説話によると、ある廟に不思議な枕があり、良縁を切望する男がそれを借りて穴から中に入り、豪華な屋敷に住む女を娶り、子供を六人ももうけて、数十年幸せに暮らしたが、はっと目が覚めたというのである。

この男は単に願いどおりの結婚をしただけなのだが、沈既済はさらに脚色を加え、盧生に功成り名挙げさせ、栄耀富貴を獲得させながら、二度まですべてを失う恐ろしさを経験させ、「世の中の無常」を悟らせたのである。それは楊炎の引き立てで出世したが、その楊炎に連座して流された沈既済の苦難の体験にもとづいているものであったろうし、同時代の、そして後代の中国知識人たちの同情と共感を強く引くものであったにちがいない。

２　明雑劇「呂翁三化邯鄲店」

邯鄲の宿屋で盧生に枕を貸した呂翁というのは、仙人の呂洞賓（もとの名は呂岩）のことである。呂洞賓は実在の人物で、もともとは唐の皇室の一人で李姓であったが、則天武后が皇室の子孫を虐殺するにおよび、妻子とともに山奥に逃げ隠れ、姓を呂に変えた。岩陰や洞窟の中に住んだので、呂岩、呂洞賓とも名乗るようになったという。酒豪であり、詩作にすぐれ、剣術の達人でもあり、百歳をすぎても飛ぶように走っていたので、「酒仙」、「詩仙」、「剣仙」などと呼ばれていた。民間には彼にまつわる伝承が多くあり、それにもとづいて書かれたのが、元雑劇の「黄粱夢」である。

「黄粱夢」の正式の題名は「邯鄲道省悟黄粱夢雑劇」で、作者は馬致遠（１２５１年頃在世）である。仙道を達成する前の呂洞賓は功名心が強く、酒色財気に心が染まっている。そこで仙人の鍾離がやってきて、彼の解脱を助けるというのがこのドラマの趣旨である。仙人になってからの呂洞賓は、今度は他の者を教化して解脱を助ける番にまわるわけで、明雑劇の「呂翁三化邯鄲店」は呂洞賓を「正末」（主人公）として、彼がいかに邯鄲の盧生を解脱させるかを趣旨とする。

雑劇は四折（幕）から成るが、まず「第一折」では柳塘荘に住む盧生（名は道成）のところに呂翁がやってきて、問答をしかける。

（呂洞賓）「近日有何養生之楽。」

（最近はどのように人生を楽しんでいるのかね。）

（盧　生）「不過力田読書。」

（畑仕事と勉強に精を出しているだけです。）

（呂洞賓）「這力田乃荘農之業。何楽之有。」

（畑仕事は村の農民の生業だ。何の楽しみがある？）

（盧　生）「道人説差了也。這力田呵。春耕夏耨。秋収冬蔵。無飢寒之憂。何不為楽。」

（おっしゃることは間違っています。畑仕事というのは、春に耕し夏に草刈り、秋に収穫して冬に貯蔵する。飢寒の憂いがなくなるのですから、楽しいではありません

か。)

(呂洞賓)「這読書朝暮之勤。何為自苦。」

(朝夕勤めて勉強するのは、無意味な苦しみではないか？)

(盧　生)「這道人又説差了。這読書呵。乃立功名。取富貴。前程万里。豈不美乎。」

(それも間違っています。勉強というのは、功名を立て、富貴を獲得する道です。前途は万里ものびているのですから、すばらしいではありませんか。)

(呂洞賓)「你則想前程。而不想正道。呆漢。回頭便是。」

(あんたは前途ばかり考えて、正道というものを考えようとしない。馬鹿者。振り返ってごらん。)

盧生はむっとする。そして呂翁が出家者だというのに剣を背負っているので、異としてそのわけを聞く。すると呂洞賓は答える。

(呂洞賓)「這剣五金之英。太陽之精。寄気託霊。匪礪匪硎。揮之有折衝之気。服之有八面
之威。斬三尸。駆六賊。於汝亦有所益。」

(この剣は金・銀・銅・鉄・錫の五金の最良を材に使い、太陽の精気、空中の気と霊を吹き込んで鋳造されたものだ。研いだり磨いたりしなくても、振るっただけですべてを断ち切る気勢を見せ、身に帯びれば八方に威風を示す。三尸を斬り、六賊を駆逐する。あんたには益があるぞ。)

(盧　生)「請問三尸六賊。是何物也。」

(三尸・六賊というのは何のことです？)

(呂洞賓)「凡人腹隠三尸。令人促寿。身迷六賊。使人昏乱。秀才。你若棄俗出家。修真楽道。入長生之路。何憂此等。」

(人の腹の中には三匹の悪虫が隠れていて、命をむしばんでいる。からだは目・耳・鼻・舌・身・心の六賊がい

て、精神を迷わし、混乱させている。秀才さんよ。俗世を棄てて出家し、真を修養して道を楽しめば、不老長生の路に入れるのだから、こうした憂いはなくなるよ。）

（盧　生）「道人。你又説的差了也。吾乃孔門弟子。豈学異端之術。」

（おっしゃることはまたまた間違っています。私は孔門の弟子なのです。異端の術を学ぶわけにはいきません。）

（呂洞賓）「秀才。你道你博覧群書。這道徳経神仙傳。你也看来麼。」

（秀才さんよ。あんたは沢山の本を読んでいるというが、『道徳経』や『神仙傳』を読んでいるのかな。）

（盧　生）「我也曾看。皆虚誕渺茫之事。」

（読んだことがありますよ。みんな虚言の馬鹿らしいことです。）

（呂洞賓）「老子道徳経。皆修己治人之法。至道存焉。豈為虚誕也。」

（老子の『道徳経』は「修己治人」の法、最高の道を説いている。虚言の馬鹿らしいことなどではない！）

呂洞賓はそれから仙道のすばらしさを言葉を尽くして言い聞かせるのであるが、盧生は心を動かされない。そこで呂洞賓は歌う。

（柳葉児）

你則待為卿相	そなたの望みは公卿・宰相
儹羸餘万廩千倉	千倉万廩を満たすこと
可不道	しかして言わず
催人白髪三千丈	白髪三千丈の行く末を
則指望	ただ望む
家私旺積蚕桑	蚕と桑のたくわえを
全不顧	まったくもって顧みない
両字無常	「無常」というこの二字を

この問答は「枕中記」にはないもので、立身出世の道をめざす儒生と養生保真の道に徹する道士との対立があざやかに描かれている。ともあれ、盧生はおいそれと説得されないので、呂洞賓は無理押しをせずに去って、「第一折」は終わる。

「第二折」は呂洞賓二度目の教化である。盧生は用事で南の村に行くことになっているので、呂洞賓はその道端に涼しげな酒店を作り、主人に変装して待ち構える。やってきた盧生は暑さのあまり酒店で一休みすることにし、こうして呂洞賓はふたたび盧生と問答することになる。しかし盧生は相変わらず説得されないので、呂洞賓は青磁の枕を取り出して盧生を夢の世界にさそいこむ。

「第三折」では、盧生は夢の世界で科挙の試験に及第し、さまざまな勲功を上げ、どんどん出世して国の重鎮となる。崔氏を妻とし、五人の息子をもうけ、幸せな生活が五十年も続いている。ところが乱民の暴動が起こり、彼も軍を出して鎮圧に向かうべきであったのだが、静観していたために皇帝の怒りを買い、逮捕されて京兆府（首都）の槀街坊（罪人の処刑地）に送られることになる。呂洞賓はその道中の川辺で漁夫に扮して待ち構えている。こうして三度目の問答が行なわれる。

護送の捕吏に追い立てられて登場する盧生は、飢えて疲れきっており、漁夫の小舟に乗せてくれないかと頼む。漁夫はなかなかうんと言わない。そして盧生を辱めて歌う。

（尾声）

你則待幼読書	幼いときから勉強し
壮遊芸	長じて遊芸
蓋書楼	書楼建て
買農器	農具買い
図功名	図るは功名
攢財賄	財賄集め
万言策	万言労し

五陵気	五陵の気[3]
施権謀	権謀施し
展経済	世渡り謀る
追前非	前非を悟り
覚後悔	後悔覚え
望妻児	妻子恋い
盼親戚	親戚思い
哭哭啼啼	泣くや泣く
巴巴急急	オイオイと
静悄悄人烟	静まりかえり人家なく
白茫茫田地	茫茫白き田地のみ
疎刺刺風声	荒々しきは刺す風声
凍剥剥天気	凍りつきたる天のさま
少不的血裏埋身	すぐにもそなたは血にまみれ
剣下做鬼	剣の下の鬼となる
比及你	あたら
六道輪廻到人世	六道輪廻で人となる
想着那百般是非	すべての是非を考えよ
幾場黜陟	浮沈すること幾たびか
猶兀自煩心不徹	それでも苦しみ足りぬなら
黄粱夢半鐺児米	黄粱の夢炊き上がらぬ

盧生は小舟に乗せてもらうのを諦めて、よろめきながら去って行く。

「第四折」で、盧生は首都の処刑場に到着し、斬首刑を言い渡される。そして首が落ちたと思った瞬間、目が覚めるのである。見まわすと、そこは道端の酒店で、ちょうど黄粱の飯が炊き上がったところである。盧生は呂洞賓に頭を下げ、弟子にしてほしいと頼む。

---

[3] 漢の高帝（長陵）・恵帝（安陵）・景帝（陽陵）・武帝（茂陵）・昭帝（平陵）の五人の陵墓。その付近には豪遊の人士が多かった。

呂洞賓は喜んで、仙界の美しさ、仙人の生活のすばらしさを高らかに歌って、このドラマは終わる。

３　能の「邯鄲」

元以来の雑劇には「神仙道化」という部類があり、「呂翁三化邯鄲店」はこれに属する典型的な作品である。主人公は教化される側ではなく、教化する側の先達であり、彼がどのような工夫をこらして解脱を助けるかが興味の中心となっている。

しかしながら、日本の能の「邯鄲」はこのパターンにはまらない。呂洞賓は影すら現わさず、ドラマは盧生を「シテ」（主人公）として展開して行くのである。

「枕中記」においても「呂翁三化邯鄲店」においても、盧生は畑を耕しながら勉強し、科挙の試験に及第して功名と富貴を獲得しようという野心に燃える者であるが、能の「邯鄲」の盧生は旅人である。登場するとすぐ、次を歌う。

憂き世の旅に迷ひ来て	憂き世の旅に迷い来て
憂き世の旅に迷ひ来て	憂き世の旅に迷い来て
夢路をいつと定めん	いつこの夢路は終わるのか

それからこの旅がどのような旅であるかを、観客に告げる。それによると、彼は蜀の国に住む者であるが、仏道に入ることもなく、ただ茫然と明かし暮らすばかりでいる。これではいけないと思い、楚の国の羊飛山（ようひざん）に高徳の僧がいると聞き、訪ねて身の一大事を相談したいと思って旅に出たというのである。

やがて盧生は邯鄲の宿屋にたどりつく。すると宿屋の女主人が、むかし仙術を行なう泊まり客から不思議な枕をもらったので、それで寝てみるといいと言う。盧生は答える。

「さてはこれなるは聞き及びし邯鄲の枕なるべし。これはことさら門出での、世の試みに夢の告げ、天の与ふることなるべし。」

（さてはこれが聞き及んでいた邯鄲の枕であるのか。この旅はことさらの旅であるのだから、その門出にためしに寝てみよう。

天が夢の告げを下さるかもしれない。）

盧生が枕に頭をのせて眠りに入ると、帝の勅使が輿をしたがえて登場し、自分は楚の国の王に遣わされてやってきた、楚の国の王は王位を盧生に譲りたいので、この輿に乗って出向いてほしいと言う。盧生は驚いて、自分はまったく王位にふさわしい者などではないと言うと、勅使はあなたには王になる瑞相がそなわっている、だから早く輿に乗ってくれとせかす。そこで盧生は輿に乗り、楚の国の宮殿に運ばれて行く。

楚の国の宮殿はこの世のものと思えない美しさである。

もとより高き雲の上	もとより高い雲の上
月の光は明きらけき	月の光は皓々と
雲竜閣や阿房殿	雲竜閣や阿房殿
光も満ち満ちて	光は満ち満ちて
げにも妙なる有様の	まことに美しいその有様
庭には金銀の砂を敷き	庭には金銀の砂を敷き
四方の門（かど）べの玉の戸を	四方の門は玉の扉
出で入る人までも	出入りする人までも
光を飾るよそほひは	光を飾りにする装いは
まことや名に聞きし	まことに伝え聞く
寂光の都喜見城（きけんじょう）の	寂光の都、喜見城の
楽しみもかくやと	楽しみもかくあろうかと
思ふばかりの気色かな	思うばかりの様である

盧生が王位につくと、諸侯は山のような金銀珠玉を献上し、行列の無数の旗は天をもおおい、礼賛の声は地に響きわたる。宮殿の庭には東に三十余丈の銀の山が作られて太陽を象り、西に三十余丈の金の山が作られて月を象っている。ここでは太陽も月も運行を止め、春秋の移り変りも止まってしまったかのようである。

こうして盧生は五十年のあいだ王位にあって、栄華のすべてを味わいつくす。盧生の御世を寿いで、侍臣が「千代の菊の酒」を献じるが、それを飲んで盧生が踊るところがこのドラマのハイライトで

ある。

（地唄・合唱）

国土安全長久の	国土安全長久の
国土安全長久の	国土安全長久の
栄花もいや増しに	栄華はますます高まって
なほ喜びは勝り草の	この喜びをさらにます
菊の杯とりどりに	菊酒の杯をとりあげて
いざや飲まうよ	さあ、ともに飲もうよ
巡れや杯の	巡らせ、杯を
巡れや杯の	巡らせ、杯を
流れは菊水の	曲水の菊水は
流れに牽かれて	杯を流して
遄く過ぐれば	すばやく過ぎ去るので
手先づ遮る菊衣の	手でまずさえぎる
花の袂を翻して	その菊衣の袂を翻し
さすも引くも光なれや	さす手も引く手も光の中
杯の影の	杯の影
巡る空ぞ久しき	空に巡りつづける

（子方・舞童）

わが宿の	わが宿の
わが宿の	わが宿の
菊の白露けふごとに	菊の白露、日を重ね
いく代積もりて	幾代集まり
淵となるらん	淵となり
よも尽きじよも尽きじ	とこしえに尽きることなく
薬の水も泉なれば	仙薬の水も泉であるからに
汲めども汲めども	汲んでも汲んでも
いやましに出づる菊水を	ますますゆたかに湧き出る菊水
飲めば甘露もかくやらんと	飲めば甘露もこうであろうかと
心も晴れやかに	心は晴れやかに

飛び立つばかり有明の	有明の空に飛び立つばかり
夜昼となき楽しみの	夜昼とない楽しみの
栄花にも栄耀にも	栄華と栄耀は
げにこの上やあるべき	これを越えるものはない
（シテ・盧生）	
いつまでぞ	いつまでか
栄花の春も常磐にて	栄華の春は永遠
（地唄・合唱）	
なほいく久し	さらに永遠の
有明の月	有明の月
（シテ・盧生）	
月人男の舞なれば	月の男の舞であるから
雲の羽袖を重ねつつ	雲の羽衣の袖を重ねて
喜びの歌を	喜びの歌を
歌ふ夜もすがら	夜もすがら歌おう
歌ふ夜もすがら	夜もすがら歌おう
日はまた出でて	日はまた昇り
明けくなりて	明るくなり
夜かと思へば	夜かと思えば
昼になり	昼になり
昼かと思へば	昼かと思えば
月またさやけし	月が澄む
春の花咲けば	春の花が咲くかと思えば
もみぢも色濃く	紅葉が色濃くなり
夏かと思へば	夏かと思うと
雪も降りて	雪が降って
四季折々は	四季折々は
目の前にて	目の前に
春夏秋冬	春夏秋冬
万木千草も	すべての草木は

一日に花咲けり　　一度に花咲く
面白や　　なんというすばらしさ
不思議やな　　なんという不思議さ

しかしながら、五十年のこの最高の栄華も、みな夢の中のことなのであるから、盧生の目覚めとともに、跡形もなく消えてしまう。

盧生はただ茫然としている。美女たちの声と思っていたのは松風の音、宮殿楼閣と思っていたのは邯鄲の仮の宿、五十年の栄華は粟飯を炊くあいだのはかない夢にすぎなかった。

（シテ・盧生）
不思議なりや　　なんという不思議さ
計り難しや　　なんという計り難さ
つらつら人間（じんかん）の有様を　　つくづく人間の有様を
案ずるに　　考えてみると
百年の歓楽も　　百年の歓楽も
命終れば夢ぞかし　　命が終わればすべて夢

この世はなにごとも「一睡の夢」と悟った盧生は、その知恵をさずけてくれた不思議な枕に感謝し、羊飛山には行かず、家に帰って行くことになってこのドラマは終わる。

4　邯鄲の夢――中国と日本の無常観

以上のように、明雑劇「呂翁三化邯鄲店」と能「邯鄲」は、同じ「邯鄲の夢」を主題にしながら、特徴を異にしている。それは同じ父親の「枕中記」から生まれながら、中国と日本という違った文化の国で生まれ育った異母兄弟だからである。中国の母親は道教であるが、日本の母親は仏教である。したがって中国の盧生は「道教的無常観」を、日本の盧生は「仏教的無常観」を体得するにいたった。

「呂翁三化邯鄲店」の「道教的無常観」は、道家思想に由来している。「第二折」で呂洞賓の弟子が登場するときに口にする詩、「道可道、非常道。名可名、非常名。」（道の道とすべきは常の道にあらず。名の名とすべきは常の名にあらず。）は、道家の祖老子の『道

徳経』の冒頭の語であるが、道家思想の二つの世界観をあらわしている。一は「名」（言葉・観念）を超越した「有常」の世界、二は「名」によってすべてを観念化する「無常」の世界である。「常」は「恒久不変」の意味で、一の世界は「無限」の世界、二の世界は「有限」の世界ということになる。この二つの世界観は、時代を下った道教の中では「仙界」と「人間」の対立となり、「呂翁三化邯鄲店」にもそれがはっきりとあらわれている。

「人間」の世界にあって、盧生は「功名富貴」に野心を燃やしている。しかしそれは「無常」のものである。老子は『道徳経』の中で言っている。

「金玉満堂、莫之能守。富貴而驕、自遺其咎。功成身退、天之道。」（第九章）

（金玉を堂に満して、守り通すことはむずかしい。富貴になって驕れば、おのずから禍を招く。功成って身退くことが天の道である。）

盧生は『道徳経』や『神仙傳』を異端の「虚言」と考え、儒家が唱道する「修身・斉家・治国・平天下」の道こそ正統であると信じて学問している。しかしながら儒家の学問は科挙の試験と結びついてから、単なる出世の手段、富貴への道とみなされて堕落してしまった。科挙の試験に及第した者の多くは偽学問をした偽君子であり、彼らはさらなる功名富貴を追い求めて讒言や陰謀をくりひろげ、かつは「酒色財気」に溺れている。呂洞賓は盧生をこうした欲望渦巻く「人間」から、無欲清浄な「仙界」に連れ出そうとするのである。

呂洞賓は盧生に「比及你六道輪廻到人世」（あたら六道輪廻で人となる）と言っている　　が、彼がいざなおうとしている「仙界」は仏教の「六道」（天上・人間・修羅・地獄・餓鬼・畜生）の中にはない。六道の「天上」は極楽であるが、死後にはじめて行きつけるところである。しかも永遠にそこにとどまることができるとは限らず、他の道に流転するかもしれない。しかし「仙界」はそうでな

い。この地上のどこか遠くの秘境にあって、「東華帝君」[4]が統べる永遠の楽土、すなわち「常世」なのである。呂洞賓は悟りを得たあとの盧生に言う。

（駐馬聴）	
脱骨超形	凡骨を脱し凡形を超え
万里西風遊太清	万里西風に乗って遊ぶ太清仙境
離凡入聖	凡を離れ聖に入り
五明宮内賀長生・・・	五明宮[5]にて長生を賀す
（喬牌児）	
這天上白玉京	この天上の白玉[6]の都
你曾記古人	知るや古人の記載
詠五城十二楼	五城十二楼の詠
是真仙境・・・	これまさに仙境・・・
（掛玉鈎）	
你覰	見よ
這玉殿金扉絢紫清	この玉殿金扉のまばゆい清らかさ
這答児親領東華命	東華帝君の命に従い作られた
金作蛟龍簇綉楹	龍がからまる金柱の数々

4　仙界の太晨宮に住む道教の神。紫の雲が屋根になり、青い雲が城の池になっている。一説によると、かつては崑崙山に住んでいたが、後に五台山の紫府洞に住むようになり、「東華紫府少陽君」と号したという。また民間伝説では毎年旧暦六月十五日に人間界に降臨し、十月十六日に昇天する。ちなみに旧暦二月六日が生誕祭である。

5 丹田（玄都境の田）の一。丹田には上・中・下の三田があり、五明宮は中の丹田のこと。「中宮黄庭内境」とも呼ばれ、清らかな光があまねく照らしているので、五明宮とも呼ばれる。

6　丹田の一。外丹のこと。また玉の名でもあり、食すれば長生を得て仙人になる。

光燦爛相輝映	燦爛と光り輝きあう
謝聖恩施恭敬	帝の聖恩を感謝してうやうやしく
瞻望宸光	仙人は朝の光を待ちわびて
頓首虔誠	頓首して誠意敬虔を示す

この宮殿楼閣は、俗塵を超越した「太清仙境」にあって、かぎりなく清浄に光り輝いている。ここに住む仙人は、もはや地上でのような飲食起居はしない。

（雁児落）

飢飡玉兔精	飢えれば玉兔の精[7]を食い
渇飲銀河凝	渇けば銀河の氷水を飲む
熱呵	暑ければ
綃蒙紫霧軽	紫の霧の薄衣
寒呵	寒ければ
錦苫丹霞静	紅の霞の錦を着
出入呵	出入りには
穏駕彩鸞軿	五色の鸞の車に乗り
睡呵	眠ければ
静靠碧雲屏	青雲の屏によりかかり
飲酒呵	飲酒には
香泛瓊瑶浪・・・	玉の杯香り酒・・・

かくてこの仙界に住む者たちは、不老長生、永遠の命を獲得する。

呂洞賓はこのように、「功名富貴」・「酒色財気」の「無常の人間」を否定しながら、至福の「常世」を賛美する。「邯鄲の夢」から覚めた盧生は、こうして「無常」を超えた「仙界」をめざす者となるわけであるが、同時にそれはまた新しい「夢」の始まりである。この地上に永遠の楽土があって、人は生きながらそこにたどりつけるという「夢」である。「呂翁三化邯鄲店」の観衆は、この楽しい「夢」をいただいて家に帰って行く。ところが能の「邯鄲」の観衆はそうでない。

[7] 月に住む兔が搗く仙薬の飯。

能の盧生は書生ではなく、学問によって立身出世をとげようとする野心家ではない。ただいかに生きるべきかを考える求道者で、蜀の国から楚の国に旅する途中で邯鄲にやってきた。地理的に言ってこれはありえないことで、作者は中国の地理をよく知らなかったのだろうと疑われている。それはそれとして、盧生が楚の国をめざしていたこと、夢の中で楚の国の王となったことには意味がある。楚の国は偉大な詩人屈原の国、屈原の弟子の宋玉の国であり、『文選』におさめられた彼らの詩は、古くから日本人に知られていた。中でも宋玉の「高唐賦」は、巫山の神女が王の夢の中に現われて枕席に侍ったが、夢がさめるとあざやかな雲がたなびいていたという話をもとにしており、盧生の夢中の場としてもっともふさわしいと考えられたのであろう。

盧生が王となった楚の国は、俗世を超越した「寂光の都」、仏の浄土と見まがう美しさである。そこで彼はこれ以上ない栄華栄耀を味わう。しかし、しょせんは夢の中の栄華栄耀である。「時」が来れば夢は破れ、すべて消えはてる。

邯鄲の枕の上に目覚めた盧生は、悟りを得て家に帰って行く。この世の栄華栄耀は、どんなものでも「時」が来れば、夢幻の花、優曇華（うどんげ）のように消えてしまう運命にあるのだという「無常」の悟りである。

この悟りを得るために、盧生はだれの助けも借りていない。

南無三宝	南無三宝
南無三宝	南無三宝
よくよく思へば	よくよく思えば
出離を求むる	出離を求めよと
知識はこの枕なり	知識を与えるこの枕
げに有難や邯鄲の	まことに有難い邯鄲の枕
夢の世ぞと悟り得て	この世は夢の世と悟りを得て
望みかなへて帰りけり	望みをかなえて帰って行った

邯鄲の宿では、主人が粟飯を炊いているだけで、呂洞賓のように

地上の楽園、「常世」にいざなってくれる者はいない。なぜなら「六道」の外にある「仏の浄土」は、この地上のどこか秘境にあるのではなく、死後にはじめて到ることができるからである。その浄土に到るためには、「時」が支配するこの世から「出離」し、しかも「時」とともに輪廻する「六道」からも「出離」するしか道はない。この一生は「邯鄲の夢」と考えてすべてを諦め、「六道」の「天上」に生まれかわる夢さえも捨てるのである。能の「邯鄲」の観衆は、こうして「夢」を捨てることを教えられて家に帰って行く。

「仙界」への夢をいただいて楽しく帰って行く中国の観衆と、「諦め」という深い悲哀

を抱いて帰って行く日本の観衆。異母兄弟はこのように一人は楽観的な無常観を、もう一人は悲観的無常観を観衆に与える。同じ「邯鄲の夢」が、中国と日本ではまったく対照的な感情の色をとって見られているわけである。

《テキスト》
「枕中記」（王夢鴎撰『唐人小説研究二集』・台北芸文印書館・１９７４年）
「呂翁三化邯鄲店」（元王実甫等撰『孤本元明雜劇』九・台湾商務印書館・１９７８年）
「邯鄲」（日本古典文学大系『謡曲集』下・岩波書店・１９７２年）

《主要参考文献》
陳萬鼐著『元明清劇曲史』（台湾商務印書館・１９６７）
中国道教協会・蘇州道教協会編『道教大辞典』（華夏出版社・１９９３）
梁辰・張志東選注『黄梁夢詩詞精選』（北京中国文聯出版・１９９９年）
秋山虔他編集『日本古典文学史の基礎知識』（有斐閣・１９７５）
栗山理一編『日本文学における美の構造』（雄山閣・１９７６）
久松潜一・市古貞次編集『新版日本文学史３・中世』（至文堂・１９７３）